

豪州メルボルン大学と「ケーススタディアフタヌーン：豪州・日本からのスナップショット 高齢者向け統合アライドヘルスケア」を開催

保健科学研究院と国際連携機構は、研究連携強化を図っている豪州メルボルン大学と、9月16日（金）に「ケーススタディアフタヌーン：豪州・日本からのスナップショット 高齢者向け統合アライドヘルスケア」をオンラインで開催しました。

本イベントは、3月に開催された両大学による「ヘルシーエイジングに関するバーチャルコンファレンス」の認知症系研究者をベースに、両校共同出資ファンドの一環で企画されたものです。大学内外のアライドヘルスケア従事者（医者、看護師以外の医療従事者）の知見を持ち寄ることで高齢者医療を包括的に考える契機になればと、一般参加者を受け入れ、同時通訳付で配信されました。

本イベントは保健科学研究院の澤村大輔講師、メルボルン大学医学・歯学・保健科学研究院のマリアヌ・コールマン博士をモデレータとし、矢野理香副理事（保健科学研究院副院長、研究院長職務代行）、アリシア・

スピトル研究担当副院長の挨拶で幕を開けました。

北海道、ヴィクトリア州における「病院及び高齢者医療施設、地域社会における高齢者医療でのアライドヘルスの役割」について、メルボルン大学のサンドラ・イウリアーノ博士が豪州の現状を述べ、クリア・マディソン博士が高齢者疾患専門家として、ノッシュ栄養士会社のルイズ・マレー氏が栄養士として、ヴィクトリア州の医療提供機関であるウェスタンヘルス医学部門のミラ・セールス博士が運動生理学士として、それぞれの観点から現場事情を共有しました。また、本学の長谷川直哉准教授が北海道の現状と理学療法士としての見解を、訪問看護ステーションポット東の福島篤氏が地域高齢者向けヘルスケアワーカーとしての現場について紹介しました。

本イベントは、北海道、ヴィクトリア州を拠点とする医療・保健関係者の視点から、エビデンスに基づく高齢者ケアのベストプラクティスや事例シナ

リオを共有し、日豪の高齢者支援の枠組みの共通点・相違点を理解すること、また、国際社会に貢献できる重要なニーズや、より良い高齢者ケアの実践に繋がる研究シーズを見つけ出すことを目指しており、令和5年2月に北海道大学で開催されるハイブリッドイベントへ繋がるものです。

今般は、両地方の課題である遠隔地で働く地域医療従事者への研修機会、将来を担う双方の学部学生、大学院生に海外の事例を紹介する機会にもなりました。

本イベントには、北海道医療大学、札幌医科大学、藤女子大学、文教大学、旭川医科大学病院、東京都立大学、ディーキン大学、ロイヤルメルボルン病院のほか、国内外の民間病院、医療クリニック、訪問介護団体、薬局、保健所、保健省から100名以上が参加し、多くの質問が飛び交いました。

（保健科学研究院、国際連携機構）



参加者集合写真



矢野北海道大学副理事・保健科学研究院副院長・研究院長職務代行



フライヤー